

高機能広汎性発達障害のある中高生の グループ活動における協同ブロック制作の試み

A Collaborative Expression using Blocks for Students with High-Functioning Pervasive Developmental Disorder

加藤 大樹¹⁾, 小倉 正義²⁾, 中澤 紗矢香³⁾
笹川 佑記⁴⁾, 森田 美弥子⁵⁾

Daiki KATO, Masayoshi OGURA, Sayaka NAKAZAWA
Yuuki SASAKAWA, Miyako MORITA

I. 問題と目的

芸術療法の技法の1つに、ブロックを用いた表現技法（以下、ブロック技法）がある。臨床場面において、ブロック表現を導入した試みとしては、入江ら（1990）、入江（2003）などがある。これらの研究では、選択性緘黙児の面接においてブロック制作を導入し、次第に表現が豊かになっていくプロセスを事例研究としてまとめている。加藤（2006）は、箱庭療法やコラージュ技法の理論的背景をもとに、保証された枠組みの中でブロックを用いた表現をする技法を新たに試み、その効果を検討した。具体的には、25cm四方の基礎板とよばれるプラスチック製の板の上で、様々な形状のブロックや人形を用いて、自由な表現が行われた。POMS（Profile of Mood States）を用いて、制作前後における気分の変化が検討された結果、ブロック制作体験によってネガティブな感情が軽減されることが

認められ、個別臨床場面におけるブロック技法の活用の可能性が示された。

様々な媒体の中でも、ブロックという素材は、親しみやすいものであると同時に、組み合わせの自由度の高さなどから、個別臨床場面のみならず、グループにおける協同制作にも適用が可能であると考えられる。Legoff（2004）は、自閉症児のグループセラピーの中で、ブロックを用いた表現活動を実施し、その効果を検討している。特に、ソーシャル・スキルの観点からの検討が行われ、対人スキルの発達を援助する上での媒体としての活用の可能性が示されている。また、加藤ら（2008）は、個別場面におけるブロック技法の知見を応用し、高校生を対象とした協同ブロック制作を実践した。その結果、参加者どうしのコミュニケーションの促進や、自分自身や他者に対する気づきや理解を深める機会として、協同ブロック制作が効果的に機能する可能性が示された。

協同ブロック制作は、高機能広汎性発達障害のある人たちにとって、コミュニケーションの媒体や、他者との関わりをサポートする

1) 金城学院大学人間科学部

2) 鳴門教育大学

3) 神谷クリニック・南豊田病院

4) 医療法人福智会すずかけクリニック

5) 名古屋大学

ツールの1つとして活用することができるのではないか。他者と協同してブロック制作に取り組む体験により、参加者どうしのラポール形成が促進され、自分自身や他者に対する信頼感が変化すると考えられる。そこで本研究では、高機能広汎性発達障害のある中学生および高校生を対象に、協同ブロック制作を実施し、①協同ブロック制作を通じた自分自身や他者への信頼感の変化、②協同ブロック制作の表現内容やプロセスから推察される参加者の体験について検討することで、協同ブロック制作の今後の活用の可能性を探ることを目的とする。

II. 方法

1. 対象

X県自閉症協会に所属し、会が主催するソーシャルスキル・トレーニングを目的としたグループ活動に参加している中学生および高校生6名を対象とした(中学生3名、高校生3名、すべて男性)。対象者は、医療機関において、高機能自閉症、アスペルガー障害、高機能広汎性発達障害のいずれかの診断がされている。

2. 手続き

ソーシャルスキル・トレーニングを目的として行われているグループ活動は、Y年～Y+1年にかけて全6回行われた。そのグループ活動の第2回目に、参加者どうしの関係づくり、自分や他者への気づきやコミュニケーションの促進を目的とした活動の一つとして、協同ブロック制作が実施された。

参加者は、中学生3名のグループと、高校生3名の2つのグループに分かれて制作を行った。「この板の上で、ブロックや人形を使って、みんなで好きなものを作ってみよう」という教示のもと、25cm四方のレゴの基礎

版を4枚並べて配置し、その上でブロックを用いた自由な表現がされた。様々な色の四角形の基本的な形状のブロック、窓枠やタイヤなどの特殊な形状のブロック、既製のレゴの人形が制作に十分な量用意された。各グループに、臨床心理学を専攻する大学院生が1人ずつ、ファシリテーターとして参加した。制作時間はおよそ1時間であった。

制作の前後において、天貝(1995)の信頼感尺度への回答が求められた。本研究では、「自分への信頼」、「他人への信頼」、「不信」の各下位尺度のうち、「自分への信頼」(6項目)、「他人への信頼」(8項目)の2つの下位尺度を用いた。また、制作終了後、作品の紹介や感想などについて話し合うシェアリングの時間が設けられた。

III. 結果と考察

1. 制作前後における信頼感の変化からの検討

制作前後における、信頼感尺度の各項目の得点が比較され、制作後の得点が、「増加」、「減少」、「変化なし」の3つのタイプに分類された。「自分への信頼」と「他人への信頼」それぞれのカテゴリについて、制作前後における、「増加」、「減少」、「変化なし」の各タイプの出現度数の割合が検討された。自分への信頼($\chi^2(2)=13.5, p<.01$)、他人への信頼($\chi^2(2)=19.63, p<.01$)の両方において、出現率に有意な差が認められた。ライアンの名義水準を用いた多重比較を行った結果、自分への信頼では、「変化なし」の出現率が「減少」より有意に高かった($p<.05$)。他人への信頼では、「増加」が「減少」より有意に高く($p<.05$)、「変化なし」が「減少」より有意に高かった($p<.05$)。ブロック制作前後における自分への信頼と他人への信頼の変化を表1に示した。

また、信頼感の増加や減少について詳細に

表1. ブロック制作前後における自分への信頼と他人への信頼の変化

	増加	減少	変化なし	
自分への信頼	12	3	21	変化なし>減少*
他人への信頼	15	4	29	増加>減少*, 変化なし>減少*

*p<.05

検討するため、信頼感尺度における全14項目について、制作前後における得点の増加が認められた人数と、減少が認められた人数がカウントされた。その結果、「自分への信頼」6項目のうち、「私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う」、「私は、自分自身を、ある程度は信頼できる」の2項目において、半数以上の参加者に増加が認められた。また、「他人への信頼」8項目のうち、「私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う」、「これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる」の2項目において、半数以上の参加者に得点の増加が認められた。「自分への信頼」「他人への信頼」ともに、半数以上の参加者において得点の減少が認められた項目はなかった。

自分への信頼に関して、得点が減少した度数が、得点に変化がなかった度数に対して有意に低かったことから、協同ブロック制作体験は、参加者の自己信頼感を侵害するものではないと考えられる。このことは、ブロック技法の枠組みが持つ安全性の高さに関連しているのではないかと考えられる。ブロック技法は、箱庭療法やコラージュ技法などの理論的背景を基盤として開発された技法である。何もない状態から表現を生み出すのではなく、素材の組み合わせにより表現をするという点は、箱庭療法やコラージュ技法と共通する点である。また、箱庭やコラージュに共通するものとして「枠」の概念がある。枠が保障されていることによって、安心して自由な表現をすることができる。箱庭は木枠によって、コラージュは画用紙によってこれが保障されている。ブ

ロック技法では、作品を配置する基礎板がこの役割を果たし、制作者は基礎板の上で自分自身の世界を展開することが可能になると考えられる。このような、ブロック技法が持つ安全性の高さや侵襲性の低さが、自分自身に対する信頼感を侵害しないことに関連しているのではないかと考えられる。自分への信頼に関する項目の中で、「私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う」、「私は、自分自身を、ある程度は信頼できる」の2項目は、半数以上の参加者において増加が認められた。この2項目では、他の項目に比べ、今この時点における自己信頼感が簡潔かつストレートな表現で記述されている。協同ブロック制作体験による、今ここでの信頼感の変化が得点の増加に表れているのではないかと考えられる。高機能広汎性発達障害のある人は、日々の生活の中で、他者とうまく関わることでできない経験などが積み重ねられることにより、自尊感情の低下や、自分自身に対する信頼感が侵害されることもあることが、これまで指摘されてきている。このような二次障害に対するケアに対しても、協同ブロック制作は有効であると考えられる。

さらに、他人への信頼に関して、得点が増加した度数が、減少した度数に対して有意に高かったことから、協同ブロック制作が、他者に対する信頼感を促進していると考えられる。加藤ら（2008）では、高校生のグループにおける協同ブロック制作の感想を分類した結果、“受け入れられる安心感”や“互いの個性への気づき”などの、他者に対する信頼感に関わるカテゴリが認められた。グループの特性が異なるため、参加者の内的体験に差

異はあると考えられるが、本研究においても、安心感や他者に対する興味のめばえなど、類似した体験が得られたのではないだろうか。他人への信頼に関する項目のうち、「私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う」、「これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる」の2項目において、半数以上の参加者に得点の増加が認められた。ブロック表現を媒介することにより、参加者どうしの交流が促進され、このことが、他者に対する信頼感にポジティブな影響を与えたと考えられる。近喰(1999)は、家族コラージュにおける合同法の効果に関して、“相手のコラージュ作品をチラッとでも見る視覚化行為による相互作用が展開されてくるし、相手と同じ切り抜きを貼る取入れ行為やコラージュ制作から生じる特徴の一つでもある言語化という発散行為などの相互作用も展開されてくる”と指摘している。今回の協同ブロック制作においても、ブロックという親しみやすい媒体が、参加者どうしの交流に効果的に機能したといえる。それに加えて、全体を見守るファシリテーターの存在が参加者の相互作用をサポートし、他者信頼感にポジティブな影響を与えたのではないか。

2. 実際の協同制作場面からの検討

参加者どうしのダイナミクスが、より制作プロセスに反映されていた中学生のグループに注目し、制作過程や表現内容からの考察を試みる。実際の表現例を図1に示した。

右上の領域はAによる表現である。制作の序盤、Aは、枠の外でブロックに触れて感触を確かめたり、積み上げたりして、なかなか基礎板にブロックを配置しようとしなかった。途中でCが席を立ち、Aと一緒に制作を始めてから、家と其中で過ごす人が表現された。終盤になると、他の参加者に対して、

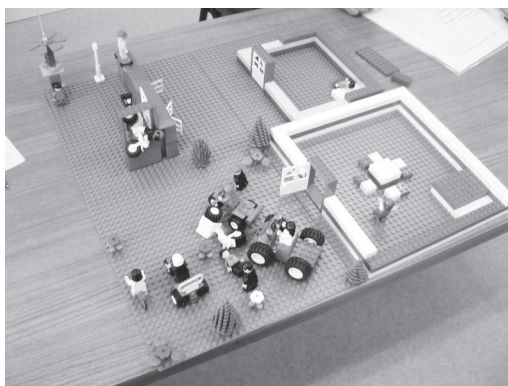


図1. 実際の表現例

「ここに何か作ったら?」と提案をしたり、協同で表現をしたりという姿も多く見られるようになった。右下の領域は、Bによる表現である。最初は、組み立てた車を基礎板全体の上で走らせていたが、しばらくすると、自分の領域での表現に没頭しはじめた。Aと同様に家が表現され、その中で1人の人間が椅子にもたれかかっている。制作の途中では、Bの表現の中に、Aが様々なパーツを置いたり話しかけたりする場面が何度か見られたが、その都度、Aの提案を自分の表現に取り入れたり断ったりしていた。制作の終盤になると、Aの提案を受けて、家の中に家具が配置された。他者の提案を受け入れたり断ったりすることを通して、互いの適度な距離感を調整することに加え、ファシリテーターがコミュニケーションを媒介することにより、安心して自分自身を表現し、また受け入れられるという体験が得られたのではないか。左上の表現は、Cによる表現である。窓枠や人間を用いて、動きのある表現がされている。Cは、はじめのうち、黙々と制作に集中していた。しかし、自分の表現が一段落すると、制作の後半では、自ら席を立ってAのそばに移動し一緒に表現をする姿が見られた。相互の言語的なコミュニケーションは少なかったが、一緒にブロックを触りながら、家を表現

する様子が見られた。左下の領域は、参加者全員による表現である。途中までは、参加者それぞれが自分の領域での制作を行っていたが、制作の中盤からこのエリアで一緒に表現をする様子が見られた。Aが、Cの表現を見て連想されたアニメの話をBやファシリテーターにしたのをきっかけに、相互の交流が始まった。各自の領域や、枠の外に置いてあった車や人間を寄せ集め、一緒に動かしたり配置したりするようになった。最後にCによって花や木が配置された。Cは、当初すべての窓枠を一直線上に並べていたが、この領域で交流が始まると、窓枠の1つをこのエリアに向けて配置し直していた。また、Bも閉じられていたドアを、交流が始まってから最後に開く姿が見られた。これらの行動は、交流による影響によるものであると考えられる。

今回の制作では、参加者が思い思いに個々のイメージを表現し、その組み合わせによって、1つの表現が完成している。これに対し、加藤ら（2008）による高校生による協同制作では、役割の分担の仕方などに差異は見られたものの、いずれのグループにおいても、制作過程の中で表現するイメージの共有が行われ、全員で1つのテーマに沿って制作するという共通性が見られた。高機能広汎性発達障害のある中高生を対象とした協同制作の場合、他者とイメージを共有する作業は困難を伴うものであると予想される。そのため、はじめは、別々の基礎板の上で個々に表現に取り組むというプロセスが起こったと考えられる。言語を用いたイメージの共有や、互いの役割について話し合うという作業は難しいかもしれないが、同じ空間でそれぞれの表現をするという体験を通して、自分や他者の個性への気づきが促進されることもあるのではないか。さらに、制作を通して、互いの表現を自然に比較することにより、自分と他者の共

通性や独自性に気づくこともあるのではないか。保障された空間におけるこのような体験が、自己への気づきや自信を促進し、他者への興味や信頼感を促すことにもつながると考えられる。木村（1985）は、箱庭療法における治療的要因として、“心理的退行”や“内面の意識化”などの要素を挙げている。本研究においても、保障された枠組みの中で仲間と一緒に制作に取り組むことにより、過度の緊張にとらわれることなく、安心して表現に集中することができたと考えられる。個別臨床場面における箱庭やコラージュ制作時の体験と同様に、適度な心理的退行や自分への気づきが促進されたのではないか。木内ら（1999）は、不登校児を対象とした集団コラージュの効果に関して、独り言に近いような発言でも微妙な影響を及ぼし合っていることや、テーマについての話し合いがもたれず、他の子どもとあまり関わらない子もいたが、結果的にまとまりのある作品に仕上がりに、制作過程に集団力動が働いたことを指摘している。今回の協同ブロック制作においても、当初、直接的な言語的コミュニケーションは少なかったが、ファシリテーターが媒介することにより、次第に参加者どうしの会話が生まれ、最終的には協同で表現を楽しむ姿も見られるようになった。他者と場を共有し、一緒に表現に取り組んだという経験が、信頼感にポジティブな影響を与えたのではないだろうか。

IV. おわりに

本研究では、主に質問紙尺度を用いて参加者の信頼感の変化が検討された。質問紙尺度を用いる上では、質問項目に対する回答者の十分な理解が必要なことに加え、回答結果には参加者自身の主観的体験が反映されやすいと考えられる。より多面的な角度から協同ブ

ロック制作の効果を検討するためには、縦断的な事例研究などのアプローチを行うことも重要ではないか。また、本研究では少数の参加者の体験をもとに検討が行われたため、結果を一般化して捉えることには注意が必要であろう。ブロック技法を様々なグループにおいて応用するためには、今後の研究の蓄積が必要であると考えられる。実際に、高機能広汎性発達障害のある中高生のグループにおいて協同ブロック制作を実施する際には、参加者どうしの交流をサポートするファシリテーターの関わり方をさらに工夫していくこと、制作後のシェアリングの時間を設けることなどが大切であると考えられる。今後、広汎性発達障害などの対人関係における障害のある人を対象としたグループ活動において、様々なプログラムの1つに協同ブロック制作を取り入れることは有効であると考えられる。本研究の結果をふまえ、今後、グループ活動における協同ブロック制作の活用のしかたを検討していきたい。

付 記

本研究にご協力いただいた参加者のみなさまと保護者のみなさま、X県自閉症協会のみなさま、スタッフとして協力していただいた水野浩先生、高津梓先生に心より感謝いたします。

文 献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43(4), 364-371.
- 入江茂 2004 ブロック技法を介した場面緘黙児の精神療法過程 高江洲義英, 入江茂 (編), コラージュ療法・造形療法, 岩崎学術出版社, 39-58.
- 入江茂・大森健一 1991 相互ブロック作りを介した場面緘黙児の精神療法過程 日本芸術療法学会誌, 22(1), 50-60.
- 加藤大樹 2006 ブロックを用いた表現技法に関する基礎的研究 -POMSによる気分変容の検討および気分と作品特徴の比較- 日本芸術療法学会誌, 35(1,2), 52-62.
- 加藤大樹・服部香子・伊藤里実・森田美弥子 2008 高校生を対象とした協同ブロック制作の試み—個別描画場面との比較を通じた制作体験の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 54, 111-117.
- 木内喜久江・佐藤昌子・永井真司 1999 不登校中学生による伝言板的「壁コラージュ」のこころみ 現代のエスプリ 386, 至文堂, 203-210.
- 木村晴子 1985 箱庭療法 基礎的研究と実践 創元社.
- 近喰ふじ子 1999 (新) 家族コラージュ法の相互作用—同時制作法からコラージュ変法まで 現代のエスプリ 386, 至文堂, 96-101.
- LeGoff, D.B. 2004 Use of LEGO© as a Therapeutic Medium for Improving Social Competence. Journal of Autism and Developmental Disorders. 34(5), 557-571.